

「泥棒と悪口とどちらが悪いか」 三浦綾子（作家）

「泥棒と悪口を言うのと、どちらが悪いか」

私の教会の牧師は、「悪口の方が罪深い」と言われました。大事にしていたものや、高価なものを盗られても、生活を根底から覆されるような被害でない限り、いつかは忘れます。少しは傷つくかも知れませんが、泥棒に入られたために自殺した話はあまり聞かない。だけど、人に悪口を言われて死んだ人や少年少女の話は時折聞きます。

「うちのばあさんたら、食いしん坊で、あんな歳をしても三杯も食べるのよ」と陰で言った嫁の悪口に憤慨して、その後一切食べ物を拒否して死んだという話があります。

それと精神薄弱児の3割は、妊婦が3ヶ月以内に強烈なショックを受けたときに生まれる確率が高いと聞いたことがあります。ある妻は小姑に夫の独身時代の素行を聞き、さらに現在愛人がいることを知らされた。それは幸せ一杯の兄嫁への嫉妬から、そういうことを言ったのです。この小姑の話にちょうど妊娠したばかりの妻は大きなショックを受け、産まれたのは精神薄弱児だったそうです。恐ろしい話です。

私たちの何気なく言う悪口は、人を死に追いやり、産まれてくる子を精神薄弱児にする力がある。泥棒のような単純な罪とは違うんです。

それなのに、私たちはいとも楽しげに人の悪口を言い、また、聞いています。そして、ああ今日は楽しかったと帰っていく。人の悪口が楽しい。これが人間の悲しい性です。

もし自分が悪口を言われたら、夜も眠れないくらい怒ったり、悔しがったり、泣いたりする。自分の陰口をきいた人を憎み、顔を合わせても口もきかなくなるのではないのでしょうか。

自分がそれほど腹が立つことなら、他の人も同様に腹が立つはずです。そのはずなのに、それほど人を傷つける噂話をいとも楽しげに語る。

私たちは自分を罪人だとは思っていない。罪深いなど考えたりしない。「私は、人様に指一つ刺されることをしていません」私たちはたいていそう思っています。

それは私たちが常に二つの尺度を持っているからです。「人のすることは大変悪い」、「自分のすることはそう悪くない」。自分の過失を咎める尺度と自分以外の人の過失を咎める尺度とは全く違うのです。

一つの例を言いますとね、ある人の隣家の妻が生命保険のセールスマンと浮気をした。彼女は、「いやらしい、さかりのついた猫みたい」と眉を顰め、その隣家の夫に同情した。

何年か後に、彼女もまた他の男と通じてしまった。だが彼女は言った。「私、生まれて初めて素晴らしい恋愛をしたの。恋愛って美しいものね」。

私たちはこの人を笑うことはできません。私たちは、自分の罪がわからないということでは、この人と全く同じだと思います。

【校長雑感】

ドイツの諺に「悪口を言う者には舌に、悪口を聞く者には耳に、悪魔が宿っている」とあります。恐ろしいですねえ～

そんな悪魔がうちの学校にもウジャウジャいそうです。嫌ですねえ～

最近ではSNSで姿を隠す“目に見えない悪魔”も現れてきました。怖いですねえ～